

東日本大震災記録集

ふくしまの絆

「学校は、復興の最大の拠点」



斜面崩落で大きく傾いた住宅（福島市）

三月十二日午後二時四十六分、マグニチュード九の巨大地震が発生した。
本県でも最大震度六強を観測した。県内各地で建物の崩壊や土砂崩れがおき、道路は寸断され、ライフラインが失われた。
浜通り地方には最大二十一メートルの津波が発生し、あらゆるものが津波に飲み込まれた。
十二日には、福島第一原子力発電所で、水素爆発が起き、放射線の恐怖に襲われた。



四階建ての一階部分がつぶされた
コンクリートの建物（郡山市）



地割れにより隆起や陥没が起きた道路（会津若松市）



土砂崩れに巻き込まれた民家の捜索活動（白河市）

M9.0
マグニチュード

その時、福島は

平成23年3月11日
午後2時46分



©福島民友新聞社



水素爆発を起こした福島第1原子力発電所



©福島民報

津波で建物が流された後、火災発生(相馬市)



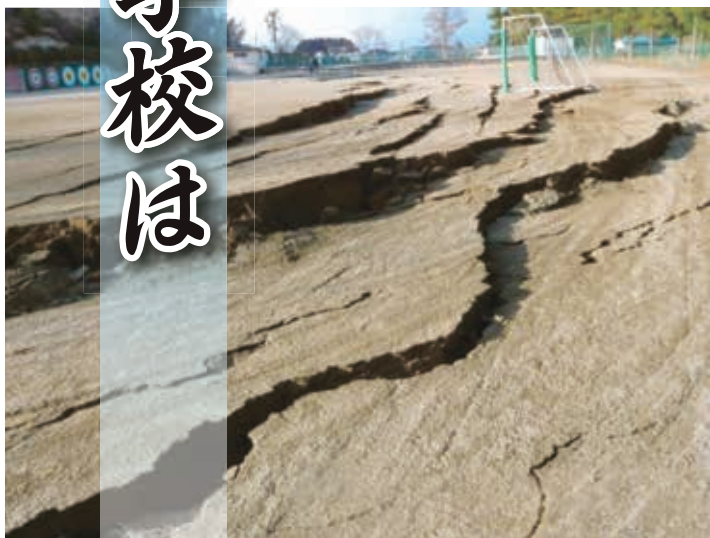
町をおそった大津波(いわき市)



その時、学校は



地震直後、校庭に避難した子どもたち



避難する子どもたち



学校にいた子どもたち、
下校中の子どもたちを、
巨大地震と、大津波がおそった。
泣き叫ぶ子ども、
座り込んでしまう子ども、
机の下に隠れる子ども・・・。
教職員は子どもを守るために必死だった。
子どもの安全を確保すること。
津波から命を守るためにより安全な場所に避難すること。
子どもたちの安否を確認すること。
子どもたちを確実に保護者に引き渡すこと。
校舎校地内の破損状況を把握すること。
学校に避難してくる地域住民に対応すること。
学校は、多くのことに対応することが求められた。





避難生活



避難する住民



プール除染作業



遊具除染作業



©福島民友新聞社

爆発した福島第1原子力発電所



校庭表土除去作業



校舎屋上除染作業

目に見えない放射線の恐怖



放射線から身を守るため、帽子、マスク着用で登校する子どもたち



ガラスバッジ（個人の積算外部被曝線量を測定する）



学校給食食材検査
給食の食材をモニタリングし、安全を確認した上で調理



子どもたちや保護者を対象とした放射線に関する講演会



モニタリングポスト

大気中の放射線量を測定し機器の表示部に測定結果を表示

ホールボディーカウンター



甲状腺エコー検査

ホールボディーカウンター（体内の蓄積量検査）と甲状腺エコー検査を実施



体育館の中を展示ボードで仕切って授業



©福島民友新聞社

学校の再開に向けて



©福島民友新聞社

合同入学式



©福島民友新聞社



心のケア「お話会」

3校が同じ敷地に並ぶ仮設校舎



体育館の復旧作業に取り組む 教職員・保護者・ボランティア



仮設体育館での活動



避難先の学校へ登校

©福島民友新聞社



仕切られた体育館での体育の授業



一年生合同遠足



体育館でのミニ運動会



学校は、復興の最大の拠点

福島県小学校長会

会長(当時) 丹 野 学

東日本大震災から、もうすぐ2年目の春を迎えます。今までに経験したことのない様々な課題が次々と押し寄せ、それぞれの課題に直面しながらも、学校のいち早い機能回復に向けて、教職員で心を一つにしながら、前に向かって歩み続けてまいりました。

この間、全国連合小学校長会を始め、各都道府県・政令指定都市・各市町村の校長会、日本教育会、及び各関連団体の皆様からは、物心両面からの継続した温かいご支援をいただき、そのことが、どれだけ励みとなって今まで歩み続けて来られたか、感謝に絶えません。「校長会は一つ」という言葉の重みを痛感させられた日々でもありました。

3月11日の東日本大震災に伴う原子力発電所の事故は、本県に、二重の災害となって押し寄せ、2年経った現在でも、復旧・復興の大きな妨げとなっています。

とくに、放射能汚染は深刻で、2年たった今でも戻ることができない本県内外に避難を余儀なくされている児童・生徒は数多くおります。

私たちは、避難児童・生徒が、どれだけ元の学校に戻ってくるかが、ひとつの復興のバロメーターになるのではないかと考えています。そのためにも、避難児童・生徒が戻って来るための学校環境の改善へと、学校の機能回復を急がなければなりません。当然、学校だけでは解決できない多くの課題も抱えておりますが、学校で出来ることも数多くあります。本県においては、国や県等の行政当局のご努力により、各学校の敷地内の除染は確実に進んでおり、学校が最も安全・安心な場所にもなっております。このような状況下にあつて、私たちが出来ること、いや取り組まなくてはならないことは、学校の中で、でき得る限り良質な教育活動を行うことに尽きます。そのための子どもたちの心のケアも重要であります。

「ふくしま」の復興には、最低でも40年以上の長い年月がかかると言われています。私たちは、震災以前の「ふくしま」よりも更に他都道府県や世界に誇ることが出来る、「福島」の復興を目指しています。そして、その復興を、目の前の子どもたちに託しているのです。だから「学校は、復興の最大の拠点」でなければならないのです。そのため、復興の担い手としての目の前の子どもたちに、どのような力を付けていかなければならないのかを模索しながら、日々の教育活動の充実に向けて、教職員一丸となって、取り組んでいるのです。当然、その歩みを止めることなど出来るはずもありません。

このたび、私たち福島県小学校長会では「災害記録集」を発刊することといたしました。千年に一度といわれる大災害の中で、私たち校長が、そして教職員が、子どもたちがどのように過酷な状況を把握したり判断したりし、行動に移したのかを記録にとどめることは、後世に生きる人々が、災害を低減化する上でかならず役に立つものと信じます。私たちは、東日本大震災をとおして「絶対」という言葉は通用しないのだということをつくづく思い知りました。そして、過酷な状況においては、自ら、精度の高い必要とする情報を入手できなければ、対応が後手後手に回ると言うことも痛感いたしました。ありとあらゆる情報が途絶えてしまう中でも、目の前の子どもたちを守り、育て続けることが、私たちに課せられた使命なのです。不平不満を口に出しても、何ら改善の糸口にもならないのです。私たちは、福島の再生に向けて、前向きに記録集の編集作業を行ってきたつもりではありますが、私たちの編集の意図をお汲み取りいただければ幸いです。

最後になりますが、私たち福島県小学校長会会員は、福島県教育委員会及び各市町村教育委員会の指導を仰ぎながら、これから、目の前の子どもたちの幸福を願い、教職員の心を一つにして教育機能回復に向けて努力し続けてまいります。「学校は復興の最大の拠点」を合言葉に、ふるさと「ふくしま」の再生の一翼を担う所存であります。明日の子らの幸せを夢見て……。

第1章 その時、子どもたちは

地震、津波、そして放射能の恐怖に
 涙する子どもがいる
 その苦しみ負けまいとする子どもがいる
 友や父母、支援してくれる人々のあたたかさに
 涙する子どもがいる
 今度は自分が人の役にたちたいと
 胸をはる子どもがいる
 夢の実現に向けて
 輝く笑顔で学び合う子どもがいる

千年に一度の出来事

新地町立福田小学校 4年 門 馬 巧

東日本大震災で、ぼくは大切な物や動物、そして大切な人をなくしてしまいました。地しんは、ぼくがまだ学校にいる時におきました。おじいちゃんがむかえに来てくれたけれど、家に帰らないで高台にひなんしました。30分くらいたったころ、目の前に波が流れてきました。ぼくが今まで見ていた波とはちがう波。すごい量と速さでした。おじいちゃんとおばあちゃんが「家は津波にのまれた。」

と言うのを聞いて、家にいた3びきのねこを思い出して、悲しくなりました。

暗くなったころ、道路をふさいでいた木材やがれきを役場の人がかたづけてくれたので、小学校まで行くことができました。学校の体育館には、友達や地域の人たちがいっぱい集まっていました。ちょうど空いている場所があったので、そこに座りました。それからやく2か月間、ぼくは、そこですごすことになりました。体育館の生活は、家ですごしている時よりずっと不便でした。人がたくさんいるので、あまり声も出せません。2か月間、とてもつかれました。

もし、津波がなく、地しんだけだったら、家もなくならなかったし、ぼくの親せきも無事だったと思います。この震災は、色々なところで、「千年に一度の出来事」と言っていました。ぼくは、どうせなら、千年に一度の震災ではなく、もっと別な楽しいことやうれしいことに当たりたかったです。

震災が起きて感じたこと

南相馬市立福浦小学校 6年 黒 沢 萌

3月11日に起きた地震・津波によってわたしは、いろいろなことを感じさせられました。マグニチュード9の地震がわたしたちをおそい、津波と原発事故によって、避難をよぎなくされ、わたしは、福島市や千葉県などいろいろな所に避難して、すごく大変な日々を送りました。原町第一小学校の体育館では、仮設住宅へ移るまでの4か月間くらいを過ごし、最初のころは、食事もパンばかりでした。また、お風呂も何日かに1回くらいで、すごく不便な生活でした。でも、多くの方々が励まして下さり、勇気づけられました。

学校は、4月22日から始まり、福浦小学校は、福島第一原子力発電所から半径20キロメートル内にあるので、鹿島区の八沢小学校で勉強することになりました。学校が始まって、他の学校の友達もたくさんできてミニ運動会やお楽しみ会などをしてすごく楽しかったです。あんな状況の中でも、友達や先生方が支えてくれたおかげで、毎日楽しく過ごすことができました。

この震災が起きて、わたしは、命の大切さや友達や家族、先生方が周りにいてくれること、食べ物のありがたさなどを感じました。この経験を生かして、これからも頑張って生きていこうと思います。

わすれられない

二本松市立新殿小学校 4年 相馬 彩香

3月11日、マグニチュード9の、とてつもない大きな地しんがありました。

最初は、そんなに大きくない地しんかと思いました。

ところが、地面は大きく動いて、建物はまどがわれるような音と、いろんなものが落ちるような音がまじり合って、なんだか体がぞくぞくしました。こんな体験は初めてで、6年生の女の子は、
「おばあちゃんが心配。」

と泣いていました。わたしも「おばあちゃん、だいじょうぶかなあ。」と思いました。

地しんの時は、ちょうど全校生が帰るときで、全員外に出ていました。先生のしじにしたいが、校庭にひなんしました。学校はガタガタいて、耳のおくまでたくさん音がしました。こわかったです。

わたしたちは、バスが来たので、バスにしばらくひなんして、先生がでんろく豆を持ってきてくれて、みんなで分けて食べました。その時は、少しほっとしました。

コミュニティーバスは、道路にひびが入って動けないので、先生の車に乗せてもらって家に帰りました。家は無事で、おばあちゃんとお父さんがいて、家族みんな無事で、安心しました。

地しんの時、一人でいた人はもっとこわくて大変だっただろうなと思いました。家族はそばにいてくれるだけでいいと思いました。家族を大事にしたいと思います。

こわかったあの日

本宮市立岩根小学校 4年 八幡 由依

こわい悲しい思い出、3月11日。あの震災は、東北地方のたくさんの人々の家族をなくしてしまった。あの日、私たちは学校で楽しく過ごしていたのに、とつぜんわけのわからない大地震が起きた。本や机の上の物がたくさん落ちた。私たちは先生の言うことを聞いて、みんなですばやく校庭に避難した。ふっていないはずの雪がふり始め、なんだか大雪に見えた。いつもは、うれしい雪のはずなのに、私にはこわい雪に見えた。とてもきれいな雪には見えなかった。私の心には「不安」しかなかった。

家に帰ってテレビをつけたが、いつものアニメはやっておらず、ニュースばかりだった。

私には、守りたい人や物がたくさんあったけど、その中で1番守りたいと思ったのは、ねこだ。ねこは、人間よりも弱い。家に帰ってねこをさがした。すると、ねこはテレビの下にいた。頭がいいなと関心し、とてもうれしかった。

その後もこわい日々が続いた。今まで水道が止まった経験はなかった。「大丈夫かな」と、毎日心の中でつぶやいていた。いつもの公園に行ってみたが、いつもとちがう感覚がした。公園のところどころに穴があいていたからだ。

この地震には、こわさと不安がいっぱいあった。学校では避難訓練をしていて本当に良かったと思う。だれ一人けがすることなく無事に避難できたからだ。これからも、きちんとやり、人に協力できることを心がけたい。地震の悲しさやこわさがわかったからこそ、思いやって生きていきたい。もう二度とあんな地震が起きないでほしい。

地震が起きてから

会津美里町立新鶴小学校 6年 渡 邊 綾

3月11日、午後2時46分。私は5年生の教室にいました。友達と遊ぶ約束をして、隣の友達や先生にさよならを言って、本当にいつもの金曜日でした。少し違うのは、その後に大きな揺れが私たちを襲ったことでした。いつもの地震より何倍もの大きな地震が起こったのです。

私は最初、びっくりして動けないでいましたが、先生の指示でようやく机の下に隠れました。揺れは激しさを増し、棚からは色々な物が次々と落ちてきました。隠れている私たちも机ごと右へ左へと動いてしまいます。だんだん不安になってきて、目からは涙がこぼれてきました。何度目かの強い揺れの後、すきを見計らって外へ避難しました。雪が降っていてとても寒かったことを覚えています。その後体育館に避難し一夜を過ごしましたが、余震が何度も起こり怖くて眠れませんでした。次の日、町全体に避難指示が出され、いわきに避難しました。どこも人がいっぱい、3回目の場所でようやく入ることができました。その体育館で1週間過ごし、今度は会津に移動することになりました。正直言って檜葉から遠くへ離れることはとてもいやでしたが、しぶしぶ移動しました。

現在、私は会津美里町の新鶴小学校にいます。今の学校でもたくさんの友達ができ、楽しく暮らしています。様々な経験をしましたが、今までお世話になった人への感謝の気持ちを忘れないように、これからも生活していきたいと思っています。

(檜葉町立檜葉南小学校より転入)

ぼくの学校

会津美里町立高田小学校 6年 宇佐見 海斗

ぼくの通っている学校は、二つあります。一つは、会津美里町立高田小学校。もう一つは、檜葉町立檜葉北小学校です。

ぼくは、3月11日の東日本大震災のため、祖父、祖母、ぼくたち兄弟3人で埼玉県に避難していました。父と母は、役場に勤めていましたので、一緒に避難はしませんでした。4月から高田小学校へ通うことになり、埼玉県から会津に来て家族みんなで暮らせるようになりました。離れて暮らしていた父母と暮らせる喜びがある一方、新しい学校でどんな先生や友だちに会えるか少し心配でした。しかし、ぼくだけでなく、今まで通っていた檜葉北小学校の友だちもたくさん来たので心強かったです。

4月の頃は、やはり心配していた通り、みんなとうまく友だちになれませんでした。でも、高田小学校の先生や友だちが優しく接してくれたので、今はもう学校へ行くのが毎日とても楽しいです。昼休みにはみんなでドッジボールをしたり、授業中に積極的に手をあげたり、クラスの一員としてがんばっています。

ぼくには、学校が二つあるんだと、今思っています。高田小学校には、檜葉北小学校にはない楽しみがあり、逆に檜葉北小学校には、高田小学校にない楽しみがあります。ぼくにとって、どちらも大切な最後の小学校です。そう思えるのは、二つの学校に通うことで、友だちがたくさん増えたからだと思っています。

(檜葉町立檜葉北小学校より転入)

第2章 その時、わたしたちは

千年に一度といわれる巨大地震

そして、その後の大津波、原発事故・・・

しかし、わたしたちは、怯まずに立ち向かった

子どもたちを守るため

教職員を守るため

学校を守るため

地域を守るため

そして、子どもたちに笑顔を蘇らせるため

浪江町立請戸小学校 教諭 遠藤 敦子
(会津若松市立鶴城小学校兼務)

私たち請戸小職員が胸を張って言える事は、「子どもの命を守る事ができた」という事だ。平成23年3月11日の地震発生時、私たちは、2年生以上の子どもたちと走って逃げた。

車椅子の子は、担任がおぶって。誰一人けがもせず、あの海近くの学校から無事に逃げたのだ。そこには、幾つかの幸運な偶然があった。

その一つは、避難場所を目指しつつそこへ行かなかった事だ。私たちは、大きな揺れの後、「津波が来る。大平山へ避難。」という校長の指示で学校の西にある小高い山を目指して走った。そこは、請戸地区の人たちの津波の際の避難場所だ。しかし、そこへ避難する訓練をしたことはなかった。田のあぜ道を走っていると、車で迎えに来たお母さんたちがいた。子どもたちの走るのが速いこともあって、

「体育館で会いましょう。」

と言って別れ、子どもを渡さなかった。私たちは南側の小道を山に入った。正しい登り口は北側の川沿いの道路にあるのだが、そこまでは距離もあるし時間もかかる。実際、北側から登った人は津波に追いつけられなかったという。私たちは、不安な思いを抱えながらも小鳥のさえずりや風の音を聞きながら津波が来ている事など知らずに逃げていた。一度も入ったことのない山道で子どもたちを誘導する事ができたのは、地域の方が一緒だった事と、その山道を知っている子がいたからだ。

私たちは、山を越えて国道に出た。そこで初めて大変な事が起きていたことを実感した。広場で町のバスを待っていたのだが、道路は渋滞、迎えのバスはなかなか来ない。そこへ偶然1台の大型トラックが来た。運転手さんが「人命救助が先だ。乗せてやる。」と言ってくれた。大人も子どもも100人位、荷台に乗せてもらって役場に着いた。助かった。まだ明るい午後4時半頃だった。役場には請戸地区の人が大勢いた。子どもを一人ひとり確認して保護者に手渡した。

大平山に逃げた人たちが、体育館に入ってきたのは夜の9時過ぎだった。津波が押し寄せ、夜になって自衛隊に救助されたのだ。山の上からは、多くの家々が流れていくのも見えたそうだ。子どもたちに、そんな怖い様子を見せずに済んだ事、ジャンパーも着ないで逃げた子どもたちに寒い思いをさせずに済んだ事を思うと、脇道に入って良かったと思った。

気がかりなのは、1年生の事だ。4校時で帰った子どもたちは逃げただろうか。児童クラブへ行った子たちの姿が見えず、連絡も取れない。無事でいてくれる事を祈った。全員の無事が確認できたのは、4月になってからだった。津波によって、請戸地区は壊滅状態、学校も使えなくなった。たくさんの人が犠牲になった。そんな中で子どもたち全員が無事だった事は大きな喜びだった。

ところで、私たちは、避難所がどのようにして機能していくのか知っているだろうか。役場の人に案内されて体育館に入ると、ブルーシートが敷かれ名簿が張り出され、毛布が配られたりして、体育館が避難所になっていく様を見た。停電、断水の中、カセットコンロを利用して炊き出しも行われた。多くの学校が災害時に避

難所に指定されているが、私たちは学校が避難所になった時、どんな活動をすればよいのか考えているだろうか。これからは、教師全員が災害に対しての意識を持って対応できるようにしておく必要があると思った。

翌朝、自宅へ戻ろうとした時、原発事故による避難命令が出た。その時は、長期間帰れないとは思っていなかった。以来、私たちはバラバラになった。車もお金も携帯電話も持っていない。命があって良かったと思ったが、身分を証明する物が何もないというのは惨めでつらいものだった。あの日着ていたジャージと上履きで、ポケットにハンカチが1枚あるだけだった。全くの着の身着のまま。私たちより後から避難した校長のズボンの裾には津波の泥が付いたままだった。

私は、津島、福島、米沢を経て会津の実家に身を寄せた。3月中は、安全な所に避難しているようにとの連絡があったからだ。テレビで避難所が映ると知っている子はいないかと必死で見た。前の学校で教えた子が近くの体育館にいることを知り、会いに行ったが浪江から来たことを告げると、スクリーニングを受けたかその証明書を持っているか等と聞かれ、なかなか会わせてはもらえなかった。これが現実だ。何もする気になれず、県警のホームページを見て安否確認をしたり、延々とテレビの情報のテロップを見たりして過ごした。3月28日に郡山の免許センターが稼働して、車の免許証を手にした時、やっと社会に認められる立場になったと思った。

さて、バラバラになった私たちを繋いだのは、携帯電話だった。ある日、若い先生が「浪江町伝言板」に「元気ですか?」と書き込みをした。すると、数人の保護者から返信メールが届いた。そこから、みんなの居場所が分かり名簿作成にも大いに役立った。私も新しいケータイを買い、クラスの子と連絡を取ることができた。ほとんどの子が県外へ避難したので、当分は会えないだろうと思った。以前の私だったら、保護者にケータイの番号やアドレスを教える等あり得ない。しかし、今回は別だ。お母さんの相談に応じたり、近況を知らせてもらったり…と、むしろ繋がりが深まったと言える。住所録や連絡網の紙1枚さえ持たずに逃げた私たちが名簿を作るのは、至難の業だと思ったが、意外にも早くまとめる事ができた。学校現場で、ケータイを所持する事には賛否両論あるだろうが、私たちにとっては大切なツールである。

4月から浪江町の教員は、二本松市の旧木幡二小に勤務することになった。子どもはいない。先生だけがいる学校で、週に3日は学校へ2日はボランティアをする生活が始まった。学校では、安否確認と名簿作成、救援物資の整理をした。ボランティアは、同僚の先生と避難所巡りをした。福島市内の避難所に行くと、そこに浪江の人が居る。請戸の人に話を聞くと「九死に一生」の話ばかりで、胸が痛んだ。

子どもがどこの学校に行くのかを聞いて、受け入れてもらう予定の学校にも行ってみた。福島市内の学校では、なぜ浪江の子が避難してくるのか情報が無かったらしく、私たちがお邪魔して話したことで、実情が分かってもらえた。年度末の仕事も終えないまま、新年度の準備、教科書も変わる年。ただでさえ忙しいはずなのに避難の子の受入の準備の仕事まで増えて、大変だっただろうと思う。手伝えないもどかしさを感じながら次々と届くランドセルや文房具の整理をした。改めて、全国からの善意を感じた。

そして桜の季節。スーツ姿の親子の姿を見て、

「ああ、今日は入学式なんだねえ。」

「私たちは、何をしているんだろう。」

と、本来の活動ができない自分たちに気持ちが沈んだ。

5月からは、兼務辞令が出た。住まいも決まらないまま学校だけは決まった。子どものいる学校に行ける事は嬉しかったが、本校児童のいるところへという約束だったので、辞令の出ない先生もいた。仲間とは複雑な思いで別れた。私は、会津若松市立鶴城小学校に配属された。請戸の子が4人もいる。子どもたちは、すっかり日常を取り戻していて元気そうだった。子どもが頑張っているのだから、私も頑張ろうと思った。会津の先生方に温かく迎え入れて頂いた事をありがたく思った。さらに、子どもたちや私たち兼務の教員を気遣って双葉地区の校長先生方が訪ねて下さった事も、とても励みになった。

子どもの笑顔が好きで教師の道を選んだ。まだ、困難は続くだろうが、離ればなれになった子も会津の子もみんなが笑顔になれるように、私なりにできる事を精一杯したいと思う。

生かされた命を大切に、感謝の心を忘れずにいたい。

第3章 学校再開に向けて

損壊して使えない学校がある
戻りたくても戻れない学校がある
子どもたちが散り散りになった学校がある
しかし
子どもたちの夢を壊してはならない
子どもたちは
「ふくしま」の未来なのだから

南相馬市立太田小学校 校長 林 弘 美

1 はじめに

南相馬市立太田小学校は、南相馬市の最南部、福島第一原子力発電所からほぼ21.2kmの地点にある。本校は、明治6年に中太田小学校として創立し、今年度で創立139年目を迎える学校である。相馬野馬追で知られる太田神社の南に位置し、田園風景に囲まれたのどかな地域である。しかし、平成23年3月の東日本大震災及び原発事故により、学区の一部が原発から20km圏内の警戒区域に指定され、本来4月には児童数134名で新年度を迎えるはずであったが、多くは区域外就学で本校を離れ、また一部の児童は現在もなお、自宅には戻れずに避難生活を続けている。現在開校している学校の中では、大甕小と並んで原発に一番近い学校となっている。(平成24年2月現在)

2 震災当日やその後の状況

○ 3月11日 東日本大震災

地震直後、児童を保護者に引き渡す。体育館及び校舎にそれほど損傷は受けなかった。その後、体育館が避難所となり、避難者を受け入れる。海岸からは離れているため、津波による住居の被害、死傷者はなかった。

○ 3月12日 原発事故による避難命令

事故直後は、正確な20km圏内ではなく、太田川から南はすべて警戒区域とされ、太田小は警戒区域圏内として避難命令が出されて原町第三中学校へ避難者と共に避難

○ 3月28日 高平小に職員室機能に移転

○ 4月18日 緊急時避難準備区域に指定されるとすぐに、八沢小に学校機能に移転

○ 4月22日 八沢小にて6校で第一学期始業式・平成23年度開始 全校生28名

○ 4月25日 八沢小にて6校ともに入学式

○ 5月23日 教職員に兼務辞令勤務公署発令

○ 8月1日 定期人事異動 兼務辞令勤務公署発令

3 学校再開までの概略

○ 8月25日 第2学期開始 児童数42名

○ 9月30日 緊急時避難準備区域解除

○ 10月14日 兼務辞令勤務公署解除

○ 10月17日 八沢小から出て大甕小の一部を間借りし、太田小として単独開校

○ 12月 自校開校準備 太田小校舎内外の除染作業を2回実施

○ 1月10日 自校太田小で開校 児童数50名

8月から、南相馬市は9月末の緊急時避難準備区域の解除を見越して、自校再開に向けて除染作業が始まった。この時点で、校舎内の放射線量は0.21マイクロシーベルト、校庭の地上1mで0.77マイクロシーベルト。まず、校庭表土処理と共に校舎の外壁、外回りの洗浄が行われた。校庭の表土は、校庭の一部に埋め込んで保管するというので、校庭を掘削したところ、地下水が大量に湧きだし、近隣の民家の井戸が涸れたため、



損壊した二宮尊徳像



八沢小のランチルームを
パネルで仕切った教室

地上より1.5メートル以上は掘削できないことが分かった。

本校の校舎はその後、震災により水道管が破損し、その工事のため、1月まで自校には戻れないことになった。そのため、緊急時避難準備区域解除後の10月には八沢小を出て、自校開校する大甕小の校舎の一部を借り、太田小として開校することとなった。大甕小に入るに当たり、3月から使われていなかった大甕小の校舎内をPTAの協力の下、除染した。この時期、勤務公署により、校長は福島市勤務、教頭は会津の磐梯町勤務であり、それぞれの勤務公署の地と南相馬を行ったり来たりしながら、除染作業と開校準備、学校の引っ越し作業を行っていた。

10月からは大甕小で学習をスタートさせ、学習環境は大幅に改善された。

兼務辞令が解除となり、県内に散らばっていた教員3名がもどってきた。勤務公署も解除となる。

大甕小に移ると間もなく、今度は1月に本校校舎へ戻る準備が始まった。12月には原子力開発研究機構のアドバイスを受けながら、地域の住民、PTA、同窓会、消防団など、太田地区を総動員しての太田小校舎内外の除染作業を2回行った。

4 校長としての対応等

(1) 8月の定期人事異動で福島市の小学校から本校に着任した時は、太田小は八沢小の校舎で、原町二小、高平小、大甕小、福浦小と共に、6校で教育活動を行っていた。校長として、現状を把握し、まず今までの児童・教職員の苦労、困難、努力、忍耐を理解し、共有することで、被災校の職員組織の一員となることに努めた。八沢小を中心に6校の校長等で週1回の運営会議を持ち、連絡調整を密に行った。

(2) 除染作業を進めるに当たって、校庭表土、校舎内外、対策本部などに項目を挙げて要請、連絡調整をした。市の線量低減化活動支援事業へ申請し、補助金をうけ、除染に必要な器具、用品を購入し、必要経費に充てることができた。

(3) 文部科学省ポータルサイトを活用し、除染に必要なぞうきん、マスク・手袋等の支援、及び教室カーテンの支援を全国に呼びかけた。全国から多くの支援物資が届けられ、そこから学校や企業、福祉団体、個人の方々と本校児童の交流も始まっている。日本全国から支援されていることで、児童に感謝と不撓不屈の気持ちを育成することができた。

(4) 今年度全く機能していないPTA組織や避難して人がいない地域に協力を求めることから始めた。区長会や町づくり委員会、同窓会に協力を依頼し、残っているPTA役員が、消防団などを集めた。地域全戸に協力依頼のチラシを配布し、児童のいない家やお年寄りだけが戻ってきている家庭からも協力を得、実家庭30の本校で、170人が集まり、2回の除染作業に臨んだ。地域が学校に寄せる期待を強く感じた。

(5) 正しく安全な除染作業を行うため、原子力開発研究機構にアドバイザーを要請し、事前の校舎内外の放射線モニタリング、除染当日の説明を依頼した。線量と安全性、作業の留意点について作業前に説明を受け、共に作業しながらアドバイスを受けた。また、開校してからの留意点を聞いた。専門家による説明は、保護者や地域の協力者に安心感を与え、放射線への正しい知識を持つことができた。

5 おわりに

震災から1年が過ぎようとしているが、原発事故による放射線への不安と安全・安心な教育環境への取組は、これからも私たちに様々な課題を投げかける。放射線問題だけでなく、地域の人の流れの変化やばらばらになった家族や保護者の就労の問題、原発賠償問題や進学についてなど、長期にわたるにつれ、問題も多様化する。児童の心のケアに努め、今ここにいる児童たちに必要な力は何かを考えながら、学校本来の姿をとり戻すよう努力していきたい。



原子力研究開発機構との
打ち合わせ



除染作業・側溝



除染作業・校舎内



ご支援ありがとうございました

第4章 復興元年・2年目の取組

「学校は、復興の最大の拠点」を合言葉に
わたしたち教職員は立ち上がった
子どもたちに笑顔を
保護者に安心を
地域に元気を
そして
ふるさと「ふくしま」を
創るため

楡葉町立楡葉南小学校 校長 田 中 芳 教

1 はじめに

楡葉南小学校のある「楡葉町」は、東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内にあり、本年8月9日まで「警戒区域」に指定され、特別に許可を得なければ立ち入ることはできなかった。8月10日以降は「避難指示解除準備区域」に再編成されたが、町内での「宿泊」はできない状態が続く。

2 震災発生から避難までの状況

平成23年3月11日の震災直後、楡葉南小学校の校舎自体は築12年であり、教室等は少し片付ければ、すぐにも学校が再開できる状態に見えた。体育館も上下水道が寸断されていたが、電気も通っており、普段と変わりがなかった。そのため避難所となり、158名の児童の多くが保護者と共に、また、多くの地域の方も一緒に体育館で一晩を過ごした。

学校は海より3kmほどの場所にあるが、津波は学校の50m手前付近まで来ていた。児童の家は9軒流された。ただ、下校前であったこと、建物に大きな損害がなかったこともあり、教職員も含め児童全員が無事であった。

翌12日、午前8時に原子力発電所の異常により、防災無線で「南方面、いわきを目指して避難するように。」との避難指示が楡葉町に出た。通常であれば、一時間弱の道のりを四時間かけて、避難先として指定されていたいわき市の小学校にたどり着いたとのことであった。幸いにもその日の夕刻には、児童全員が保護者と避難していることを確認できた。

ただ、我々教職員も、月曜日には学校を再開できる、卒業式の練習をしなければ、そんなことを考えながらの避難であったので、まさか、こんなに長く避難生活が続くとは思わなかった。すべての書類を学校に置いたままの避難であった。

その後、楡葉町は姉妹都市である会津美里町に救援を求め、16日より、第2次避難を開始し、体育館等の施設に分散しての避難生活が始まった。この間、教職員は自宅待機を強いられ、児童の避難状況の確認、連絡体制の確立に当たった。

平成23年度の開始に当たり、楡葉町教育委員会の最終的な判断は、会津美里町の学校に区域外就学することであった。4月6日、受け入れ先での区域外就学として授業をスタートした。楡葉南小46名がお世話になることになった。通学のために避難所、避難先の旅館からスクールバスを運行した。



湯本仮校舎遠景

4月14日、許可を得て楡葉南小学校に立ち入った。指導要録等永久保存の文書などを持ち出した。立ち入り時間は2時間、防護服に身を包んでの作業であった。

6月中旬に250戸の仮設住宅が完成し、避難所や避難先の旅館から移動し、プライバシーがある程度守られ、少しずつ落ち着いた生活ができるようになった。

平成23年7月末現在29名が会津美里町立新鶴小学校へ、79名がいわき市内の小学校、6名が県内他地区の小学校、40名が県外の小学校へ区域外就学を強いられた。

3 学校再開までの経過

平成23年9月より楡葉町教育委員会が核となって「校長・教頭合同会議」という形態で、学校再開に向けての会議を13回ほど継続的に行った。この中で、楡葉町立小中学校再開を平成24年度からいわき市内で行うことを決定した。また、楡葉町町立学校教職員全員による会議も3回ほど実施し、再開に向けての進捗状況を共有した。さらに、同年12月に15名の教職員からなる「学校再開準備室」（校長・教頭・教務主任・教諭・養護教諭・主査等）を設置し、組織的に再開に係る煩雑な作業を進めてきた。

一方、保護者の意向を大切に作る観点から、「アンケート調査・意向調査・保護者説明会（いわき3回・会津美里2回）」を実施し、アンケートの結果等から現状と学校再開についての説明を行った。

いわき市内で学校再開の場として決定した湯本仮校舎は、一般の社屋（コンピュータスクール）を借用したため、ある程度の教室形態はできていたが、特別教室等の不足教室・不足トイレについてはプレハブ教室や外付けトイレで対応した。備品等は、文部科学省のポータルサイトを通して支援を頂き、不足分は楡葉町内より搬出し、湯本仮校舎へ搬入した。その際、備品一つ一つについてその放射線量を測定した上で搬出し、重ねて仮校舎搬入時に線量を確かめた。その他、教育活動で使用する体育館やプールについては、近隣のいわき市の施設や学校の体育館を借用している。

学校再開に向けて特に煩雑な作業となったのは、スクールバスの対応であった。いわき市の北から南までの児童生徒がスクールバスを利用しての通学であるので、7コースで運用している。コースの選定から乗る場所・時間等の確認と、何度も細かい作業と微調整とが繰り返された。また、学校給食に準じた給食を実施するために、楡葉町振興公社に調理を委託し、仮校舎まで運送し配膳している。もちろん、食材の放射線量検査は、毎日調理場で行っている。

以上のような準備を経て、平成24年4月1日に児童数63名で楡葉南北小学校を再開し、同6日に開校式・始業式・入学式を実施した。なお、平成25年1月よりいわき明星大学地内に建設する中央台仮設校舎へ移動する予定である。

4 おわりに

学校再開より5ヶ月を過ぎようとしている。改めて、様々な制限があるが、教育に携わる者として子どもがいることが学校なのだと喜びと共に痛感している。

さらに、様々な方々から、書籍等の物資の支援やミニコンサートの開催を通して、子どもや教職員に元気を頂いたことにも大いに感謝している。

現在の段階では、楡葉町の学校としての未来像を明快に描くことは甚だ困難であると考えている。しかし、目の前の楡葉町の将来を担う可能性を秘めた児童の健やかな成長のために、微力ではあるが全力で取り組みたいと思う。



児童の登校状況

「特別部会」の設置について

～教育機能のいち早い回復を目指して～

平成23年3月11日の東日本大震災は、県民の生活基盤を根底から覆し、子どもたちを取り巻く生活環境を一変させてしまった。また、地震・津波・原発事故等の災害復興を脅かす余震や放射性物質の不安要因は、教育機能の回復にも大きな影響を及ぼしている。

そこで、県小学校長会では、教育機能のいち早い回復を目指して「特別部会」を緊急に設置し、既存の各部との有機的な関連をはかりながら、組織的で実効性の高い活動に取り組んでいくこととした。

これは、「ほんとうの空」に誇りが持てる「うつくしまふくしま」の再生を期して、今年度当初全面的に見直した、平成23年度福島県小学校長会活動方針・重点を踏まえた活動の一翼を担うものである。被災地の各学校を中心に、被災した子どもの心のケアや生活支援、指導体制の再構築、学校施設や教材の整備などを進め、被災地の正常な教育活動の復活（復興）を目指している。部会の設置については、6月9日の第1回理事会において承認され、以後、組織編成、活動計画策定、各関係機関との調整を経て、具体的活動が開始され現在に至っている。

はじめに、特別部会の役割、組織、具体的な取り組みの概要についてお知らせしたい。

先にも述べたとおり、特別部会の役割は、本県小学校の教育機能の回復を最優先課題ととらえ、以下の3点について取り組んでいくこととしている。

- (1) 教育機能回復に向けた活動
- (2) 東日本大震災への対応記録の累積
- (3) その他、会長が必要と認めた活動

この役割を踏まえた具体的な取り組みについて紹介したい。

まず、「教育機能回復」のための具体的取り組みとしては、

- (1) 特に、相馬、双葉、いわき支会を中心とした、各支会校長会活動の支援
 - ① 支会ネットワーク再構築への財政的援助も含めた支援
 - ② 被災並びに避難の各市町村校長会長と、特別部会担当者との連携強化
- (2) 情報共有支援並びに各支会間の情報交換支援
 - ① ブログ立ち上げによる会員相互の情報共有（会員限定期間限定）

第2の、東日本大震災への対応記録の累積のための具体的取り組みは、以下の通りである。

- (1) 学校に特化した、災害の実状記録の収集
 - ① 学校施設等並びに児童、教職員の被災記録
- (2) 災害復興に向けた行政施策の累積
- (3) 被災復興に向けた具体的な取り組み記録の収集（県教委、地教委、学校）

特別部会の組織は、以下の通りである。

1 部長事務局次長兼任	4 支援班研究部長ほか10名
2 副部長総務部長兼任	5 情報班行財政部長ほか4名
3 運営班生徒指導部長ほか3名	6 累積班広報部長ほか5名

次に、各班の具体的活動計画並びに現在までの活動状況についてお知らせしたい。

支援班は、被災並びに避難を余儀なくされた校長会への支援を担い、班員11名が相双地区の10市町村校長会と相馬支会、双葉支会をそれぞれ担当し、代表校長を通して、児童、教職員の状況や要望等について、相談活動を行っている。その中では、県外へ避難する児童の増加に伴う児童数の減少、学校不適応児童の存在、遠距離通勤の教職員、地教委や避難した保護者との連絡に苦慮している姿、先行きの見通しが持てないことへの不安などが指摘された。スクールカウンセラーの配置や、学校再開に向けての見通しを明らかにしてほしいなどの要望も併せて寄せられた。

支援班としては、各地区の生の声を聞き取ることを第一に活動をスタートさせた。今後は、さらに各市町村校長会長との連携を強化し、寄せられた情報を整理しつつ、校長会として可能な支援を継続していく予定である。

運営班は、各支会間の情報共有並びに情報交換支援のために、ブログの立ち上げを担当し、関係業者との折衝を重ね、6月中旬に試作を完成させた。以後、試行・改善を重ね、セキュリティ対応等を進め8月下旬にはブログの仮開設をすることができた。現在、各支会を通して会員登録の手続きを周知するとともに、登録を呼びかけている。校長会の情報交換の場として、後述するブログ利用上の留意点を十分ご理解のうえ、有効に活用していただきたい。

情報班は、ブログ開設の意図を踏まえ、被災した各支会およびその各小学校の機能回復を支援する、効果的で適切な情報の収集と提供を行う。各会員が、携帯電話等で気軽に活用できるよう、意見要望も取り入れつつ、情報内容の改善を図っていききたい。情報班では、会員のネットワーク構築のために、各校長からの情報と県校長会からのお知らせを2本の大きな柱としている。前者は、ブログ利用の留意点を遵守しつつ、会員の困りごと・悩み・入手したい情報・質問・意見・感想・情報提供などをアップする。後者は、支援班から各支会への情報提供、県小学校長会の活動に関する情報提供、会員の意見や質問に対する情報提供、県教育委員会等からの重要情報を発信する。

累積班は、東日本大震災への対応記録の累積が主な活動になる。具体的な内容として、各学校の校舎や児童・教職員の被災状況の記録、災害復興に向けた各支会・県小学校長会としての取り組みや行政施策等の記録の累積に努める。また、今回の震災によって得た様々な教訓が、今後の学校経営に役立てられるような記録や写真を収集し、24年度末には、A4版・カラー・100ページ程度の冊子としてまとめることとしている。現在、メンバー6名が、担当地区・市町村を分担して情報収集。記録累積に当たっている。会員各位の積極的な情報提供とご協力を改めてお願いしたい。

ブログ利用上の留意点を述べる。

(1) 一般的な留意点

- ① 個人情報の管理を徹底する。＊個人が特定できる情報は掲載しない。
- ② 著作権侵害・肖像権侵害に十分留意する。
- ③ 他人の誹謗中傷はしない。

(2) 校長会独自の留意点

- ① コメントの最後に「氏名、学校名」を明示する。
- ② コメントの冒頭に以下に示すカテゴリを明示する。
- ③ 携帯電話等で閲覧するため、大量の情報は載せられない。

【情報提供】：学校や各支会の現状等

【意見】：ブログの内容に対する意見

【質問】：ブログの内容についての質問

【感想】：自由な考えや思いを記述

(3) 運営等について

- ① 会員同士の自由な意見交換や、質疑応答に積極的にご利用いただきたい。
- ② 県小学校長会に対する質問等については、必要に応じて回答する予定です。内容によっては、組織を生かして（支部長に連絡・相談をする等）質問等をお願いしたい。
- ③ 上述のマナー等に反する内容については、管理者で削除することもある。

ふくしまの再生は、ふくしまの教育の復興から可能となる。そのための教育機能回復には、校長の絆が不可欠であり、被災地ばかりでなく全県下の会員のネットワーク強化が強く求められている。現下の困難な状況の中でも、教育活動の充実・向上を目指す学校経営の実現や、当面する教育課題の解決に向けた取り組みを忘れてはならない。特に、「生きる力」を育むという理念を踏まえて改訂された、新学習指導要領に基づく教育課程の完全実施元年に当たり、教育課程の確実な実施が我々が目指す大きな目標である。

目の前の困難な状況を克服し、子どもたちの学習を保証するために、校長にできることは何かを考え、会員すべての英知を結集し、特色ある教育、特色ある学校づくりを確かな足取りで推進していく必要がある。

このような目標に向かって、具体的な課題を一つ一つ着実に解決する一助とするために、特別部会を設置した。県小学校長会としては、各支会の枠を超えた各会員の横断的な連携強化を図る画期的な取り組みである。本部会の活動・内容が、すべての会員の総意のもと、校長会にふさわしい、情報提供、情報交換の場となり、子どもの笑顔が蘇る「ふくしまの教育」の復興が1日も早く実現できるよう、会員一人一人の理解と協力を重ねて求めたい。

平成24年度福島県小学校長会行財政部特別調査

1 児童数、学級数等の実態

(1) 22年度、23年度、24年度の児童・生徒数及び実学級数

【平成22年度】

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	合 計
児童数	18,133	18,439	19,269	19,447	19,523	20,266	1,208	116,285
学級数	869	841	826	785	834	809	337	5,301

【平成23年度】

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	合 計
児童数	16,214	16,931	17,256	18,084	18,297	18,612	1,240	106,634
学級数	808	792	776	723	808	748	337	4,992

【平成24年度】

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	合 計
児童数	15,210	15,840	16,589	16,987	17,862	18,268	1,339	102,095
学級数	776	754	734	713	777	738	350	4,842

(2) 平成23年5月1日以降の転入転学児童生徒数

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	合 計
転 入 数	676	756	722	755	714	667	51	4,341
転 出 数	1,190	1,206	1,111	1,128	947	644	67	6,293

<分析・考察>

○ 児童数の年度ごとの推移

本県の児童数・学級数は、震災前に比べ大幅に減少している。

全体数では、震災前の平成22年度を100としたとき、昨年8月段階で91.7（同学級数：94.2）、今年度5月段階で87.8（91.3）となっている。特に、新入学児童については、平成22年度の入学者数を100とすると、平成23年度では、89.4と一割以上新入学児童が減少しており、今年度は更に、83.9という割合になっている。

また、震災前に本県小学校に在学していた児童について、その後の児童数の推移を見ると、学年が下になるほど減少の割合が多くなっている。

学年22年度→23児童数（同学級数）→24児童数（同学級数）

1年：100→93.3（91.1）→91.5（84.5）

2年：100→93.6（92.3）→92.1（84.8）

3年：100→93.9（87.5）→92.7（94.1）

4年：100→94.1（103）→93.9（94.0）

5年：100→95.3（89.7）

※ 学級数については、複式学級はそれぞれ奇数学年にカウントしているため、児童数の推移と同様には見ることはできない。

○ 地区別の児童数の推移

地区別に児童数の推移をみると、双葉支会と相馬支会の減少幅が際立っている。それ以外では、福島支会と郡山支会での減少幅が大きくなっている。これは、浜通りにおいては原発事故に伴う警戒区域等で避難を余儀なくされているということがある。また、中通りの都市部において放射線の健康への不安からの移動が相当数あったことが考えられる。このことは、各支会における転入・転出者数からも見て取れる。多くの支会において転出者数が転入者数を大きく上回っており、児童の流出が進んだことを物語っている。ただ、田村支会と会津地区の北会津と南会津の各支会および浜通りの3支会においては、転入者数が転出者数を上回っている。このことは、県内他地区や地区内からの転出者をそれぞれの支会の学校において受け入れていることが考えられる。

2 児童の転出入の状況

(1) 福島県から他の都道府県の学校において受け入れた数

年月日	福島県内全児童数	転入学	事実上の就学	合計
23.5.1	117,668人	5,448人	337人	5,785人
23.9.1	117,668人	6,397人	180人	6,577人
24.5.1	103,324人	6,651人	42人	6,693人

(2) 福島県内の学校からの受け入れた数

年月日	福島県内の全児童数	転入学	区域外就学による転入学	事実上の就学	合計
23.5.1	117,668人	2,820人	2,661人	71人	2,891人
23.9.1	117,668人	3,102人	2,779人	11人	3,113人
24.5.1	103,324人	2,852人	2,516人	13人	2,865人

※ 区域外就学：公立の小学校における受け入れのみ

※ 事実上の就学：転入学の手続きは行っていないが、授業等に参加した者

(文部科学省調査による)

3 東日本大震災、原発事故による学校の臨時休業・移転等の状況

(1) 臨時休業・移転等の状況（平成24年2月1日現在）

① 警戒区域内のため臨時休業中

- 双葉郡浪江町立幾世橋小学校
 - 〃 請戸小学校
 - 〃 大堀小学校
 - 〃 荻野小学校

- 双葉郡双葉町立双葉南小学校
 - 〃 双葉北小学校

- 双葉郡楢葉町立楢葉南小学校
 - 〃 楢葉北小学校

計8校

② 計画的避難区域のため臨時休業中

- 双葉郡浪江町立津島小学校
- 双葉郡葛尾村立葛尾小学校

計2校

③ 震災・原発事故による学校の移転状況

- ・警戒区域内・・・・・・・・・・（警戒）
- ・緊急時避難準備区域内・・・・（緊急）（9月30日に解除された）
- ・計画的避難区域内・・・・・・・・（計画）
- ・原発事故による影響・・・・・・（原発）
- ・津波で校舎損壊・・・・・・・・・・（津波）
- ・地震で校舎損壊・・・・・・・・・・（地震）

次ページ一覧には、左記のように標記する。

始	市 町 村	学 校 名	移 転 先 等
双葉	浪江町 (1校)	浪江小 (警戒)	・旧二本松市立下川崎小学校で8月開校
	大熊町 (2校)	熊町小 (警戒) 大野小 (警戒)	・旧河東第三小学校で4月開校 ・旧河東第三小学校で4月開校
	富岡町 (2校)	富岡第一小 (警戒) 富岡第二小 (警戒)	・三春町の旧曙ブレーキ三春製造工場跡で9月開校 ・三春町の旧曙ブレーキ三春製造工場跡で9月開校
	川内村 (1校)	川内小 (緊急)	・郡山市立河内小学校で4月開校
	広野町 (1校)	広野小 (緊急)	・いわき市立中央台南小で8月開校
相馬	南相馬市 (13校)	原町第一小 (緊急) 原町第二小 (緊急) 原町第三小 (緊急) 大甕小 (緊急) 高平小 (緊急) 太田小 (緊急)	・南相馬市立鹿島小で4月開校, 10月より元校舎で再開 ・南相馬市立八沢小で4月に開校, 1月より元校舎で再開 ・南相馬市立鹿島小で4月より開校, 10月より元校舎で再開 ・南相馬市立八沢小で4月開校, 10月より元校舎で再開 ・南相馬市立八沢小で4月開校, 1月より元校舎で再開 ・南相馬市立八沢小で4月開校, 1月より元校舎で再開 ・南相馬市立八沢小で4月開校, 10月より大甕小へ, 1月より元校舎で再開
		石神第一小 (緊急) 石神第二小 (緊急) 真野小 (津波)	・前川原体育館で4月開校, 11月より鹿島中の仮設校舎に移動 ・南相馬市立上真野小で開校 ・農村環境改善センター(鹿島区)で4月開校, 11月より鹿島小仮校舎に移動
		小高小 (警戒) 福浦小 (警戒) 金房小 (警戒) 鳩原小 (警戒)	・南相馬市立鹿島小で4月開校 ・南相馬市立八沢小で4月開校, 11月より鹿島小仮校舎に移動 ・南相馬市立上真野小で4月開校, 10月より鹿島小仮設教室へ ・南相馬市立上真野小で4月開校, 10月より鹿島小仮設教室へ
	飯館村 (3校)	草野小 (計画) 飯樋小 (計画) 白石小 (計画)	・川俣町立川俣中学校で4月開校 ・川俣町立川俣中学校で4月開校 ・川俣町立川俣中学校で4月開校
	いわき市 (4校)	豊間小 (津波) 久之浜第一小(原発) 久之浜第二小(原発) 永崎小 (津波)	・いわき市立高久小で4月開校 ・いわき市立中央台北小で4月開校, 10月より元校舎で再開 ・いわき市立郷ヶ丘小で4月開校, 10月より元校舎で再開 ・いわき市立江名小で4月開校
福島	福島市 (1校)	野田小 (地震)	・3,6年は体育館で, 5年生は野田中の空教室で4月再開, 9月より仮設校舎に移動
	川俣町 (1校)	山木屋小 (計画)	・川俣町立川俣南小で4月開校
伊達	伊達市 (2校)	梁川小 (地震) 保原小 (地震)	・1～3年は伊達市立梁川小, 4～6年は県立梁川高校で4月開校 ・1,2年は旧泉原小で, 3,4年は伊達市立松陽中で, 5,6年は伊達市立桃陵中で4月開校
岩瀬	須賀川市 (1校)	第一小 (地震)	・須賀川市立第一中で4月開校, 8月から須賀川市並木町グラウンドの仮設校舎で再開
	鏡石町 (1校)	第一小 (地震)	・鏡石町立第二小と町改善センターで4月開校, 8月から校庭の仮設校舎で再開
田村	田村市 (3校)	菅谷小 (地震) 古道小 (警戒) 岩井沢小 (緊急)	・旧田村市立棚山小で4月開校 ・旧田村市立石森小で4月開校 ・旧田村市立石森小で4月開校
	小野町 (1校)	浮金小 (地震)	・小野町立浮金中学校で4月開校, 1月より元校舎で再開